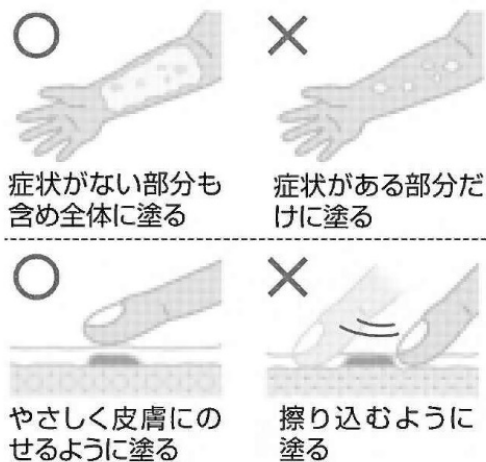


#子育て処方せん

●アトピー性皮膚炎の塗り薬を使うポイント



アトピー性皮膚炎は、皮膚を守る「バリア」機能の障害や皮膚の炎症、かゆみが連鎖的に起きる慢性疾患。多くは乳児期から発症し、最初は顔や頭、その後、体や手足、関節へと広がる。学童期には肘や膝に症状が出ることも多い。乳児の4人に1人に症状があるとの調査結果もある。

症状が出た部分をかくことで「バリア」がさらに壊れて新たな炎症を起こし、かゆみがひどくなって広がっていく悪循環となる。日頃から肌を清潔にして潤いを保つことと、炎症が起きたら早期に治療を始めることを心がけてほしい。

かゆみや赤みが治まったように見えても、皮膚の内側では炎症が続いていることが多い。こうした「かくれ炎症」が繰り返すかゆみの原因になる。治まっても、医師の指示に従って塗り薬などでの治療を続けることが重要だ。

アトピー性皮膚炎

塗り薬厚めに優しく

子どもを取り巻く病気の原因や治療法などを福岡市立こども病院の医師が解説する「#子育て処方せん」。今回は、皮膚のかゆみや湿疹に悩まされるアトピー性皮膚炎について、皮膚科長の工藤恭子医師に聞いた。



工藤恭子医師

塗るのがよい。
炎症を早期に鎮めるのに

清潔さ、保湿重要

効果的なのがステロイド外用薬だ。毛深くなるなどの副作用を気にして使うのをためらったり、罪悪感を覚えたりする保護者も少なくないが、適切に使用すれば問題ない。最近是非ステロイドの外用薬の選択肢も増えている。不安な点は医師らに相談し、指導や助言に沿って治療を進めてほしい。(聞き手・大森祐輔)

「性」親子で考える本

幼少期からジェンダーや思春期の体の変化などについて学んでもらおうと、「性」を題材にした絵本や児童書が増えている。子育て中の主婦が考案したものなど内容もバラエティーに富む。

福岡市の子供、伊東絵理加さんは昨年9月、「親子でいっしょに！こころとからだのドリル 5～8歳編」(A4判、86頁)を刊行した。クラブの経営など水商売を経験し、性の知識不足などで望まない妊娠をする女性たちを見てきた。その後、結婚して2人の娘を出産し、年齢に合った性教育の必要性を痛感したという。

年齢別の学習目標を定めた国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)の性教育の手引を基に作成。「人間関係」「人体と発達」など6章からなり、子ども自ら答えを選択したり、考えを書き込んだりできる。保護者向けに性被害や「お風呂トレーニング」



性教育のドリルを手にする伊東さん

などの解説も載せている。

伊東さんは「正しいタイミングで正しい知識を伝えることが大切。性について親子で一緒に考え、話し合うきっかけになれば」と話す。絵本や児童書の情報サイト「絵本ナビ」の磯崎園子編集長は「ジェンダーなどへの関心の高まりを背景に、子どもへの性教育の手段として絵本や児童書の需要が増えたのではないかとみている。

2200円。問い合わせは海鳥社(092・272・0120)へ。

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(yakal@yomiuri.com)へお願いいたします。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください